

Literature Cited

Amakawa, T. (1963): New or little known Asiatic species of the Family Jungermanniaceae. Journ. Hattori Bot. Lab. 26: 20-26. Grolle, R. (1964): Eine *Nardia* aus Afrika. Bot. Mag. Tokyo 77: 297-299. Schuster, R. M. (1969): The Hepaticae and Anthocerotae of North America, vol. 2, 1062 pp. New York.

* * * *

1969年度におこなわれた東大ヒマラヤ調査隊の採集品の中に *Nardia* 属の新種と思われるものが1点みつかった。外観は *Poeltia* 属や, *Marsupella* 属などの細長い shoot に似ているが, よく発達したペリギニウムならびに花被の構造から, アフリカから記載された *Nardia arnelliana* に近似の新種として記載した。この新種に関連して, *Nardia* 属の分類に新しいシステムを提唱した。

○高等植物分布資料 (72) Materials for the distribution of vascular plants in Japan (72)

○ツルソバ *Persicaria chinensis* Nakai var. *thunbergiana* Okuyama. 本州では分布も少く, 僅かに, 中国, 紀伊, 伊豆諸島に知られている。私はこれを1970年10月29日, 千葉県館山市坂足(サカダル)の部落内に花期のものを採集した。現地はヤム湿めりけのある所で, 草むらの一角にほゞ6m²にわたって繁茂している。館山在住の中山幹, 山井広両氏は以前から, この現地を知りながら, 花を見ずに不明のままになっていたが, 私にお知らせ下さったので漸く正体が判明した。現地は恐らく日本の北限と思うので報告する。標本は東大理学部植物学教室に納めた。

(千葉県立東葛飾高等学校 伊藤 至)

○ミヤマミミナグサとクモイミミナグサ *Cerastium schizopetalum* Maxim. var. *schizopetalum* and var. *bifidum* Takeda. 雲竜溪谷は表日光連峰の東端にある赤嶺山(標高2,010m)と, そのすぐ西に連なる女峰山(標高2,464m)との間の爆裂火口壁に刻まれた峻谷である。溪谷は大谷川の支流である稲荷川の上流一帯で, 特に厳冬季に現われる大氷柱は壮観で, 氷の殿堂として登山家には有名である。溪谷の兩岸はもろい火山岩の岩壁がそそり立ち, 夏季には落石の危険が多い場所だけに訪れる人は少なく, 日光地方での数少ない秘境として残っているところで, 従来植物相の調査もあまり行われていなかった。しかし数年来砂防工事用の道路が溪谷入口近くまで取り付けられるようになり, 非常に入りやすくなった。

筆者は壬生高等学校生物クラブOBの中山全央君(日大農獣医学部在学)らとともに

に、去る 6 月 7 日にコウシンソウの生態を探る目的で入谷の折、標高約 1,500 m Y 字峡手前の礫地にミヤマミナグサらしい数株を発見した。しかしこのときは未開花だったので、約 1 ヶ月後の 7 月 5 日再び訪ねたところ、開花している数株に出会い、ミヤマミナグサであることがわかった。しかもそれらの中に花卉が 2 裂するだけのクモイミナグサらしい 1 株も見出された。これらの植物はいずれも分布域が中部地方の高山に限られ、関東地方の高山には知られていないものだけに、果して自生のものかとの疑念もわいた。もし自生とすれば、短距離かも知れないが隔離分布の例というわけである。この点の解決を図ろうと、さらに 8 月 24 日に雲竜溪谷の最奥のほとんど前人未踏のアカナ沢の源流（標高約 1,950 m）に入り、ガレ場を探したところ、遂にミヤマミナグサとクモイミナグサの両者を確認することができた。しかも前回よりも株数が多く、約 2 平方メートルのところに 20 株ほども見出された。これは場所が前人未踏と言って良い程の難所だけに、移植とか播種されたものではなく、自生であると断言して良いと思う。これに関して、東京大学日光植物分園の久保田秀夫氏のお話では、1952 年の秋、同じく雲竜溪谷でミヤマミナグサと思われる一種を見たが、花がなくて確認できなかったそうである。

女峰、赤薙連峰は日光諸峰のうちで噴出年代が最も古い山で、地形上壮年期を示している。その中で雲竜溪谷一帯は、夏の間上昇気流がたちこめて、常に冷涼な気候を示しているだけに、貴重な高山植物が遺存していることは十分考えられる。これまでに雲竜溪谷にはミヤマオトコヨモギ、コヒナリンドウ、イワオウギ、クモナズナ、シコタンハコベ、タカネナデシコ、チシマゼキショウ、ヒメスギランなど日光の他の諸峰にみられない（ただしクモナズナ、チシマゼキショウは男体山にも産する）高山植物を産することが知られている。今回のミヤマミナグサ、クモイミナグサの発見は雲竜溪谷を含めて、女峰、赤薙連峰の精査の必要性を強める資料となるだろう。なお中部山岳地帯ではミヤマミナグサとクモイミナグサとはそれぞれの分布区域を持っているそうであるが、雲竜溪谷では両者が混生する。さらに花卉の切れ方を注意して見ると、細かく切れこんだものと 2 裂するだけのものとの間に、或程度の間段階的なものが存在する。この事実も中部山岳で見られるとのことではあるが、このように同一地点でというのではない。したがって雲竜溪谷源流地帯のミヤマミナグサ、クモイミナグサ混生の事実は、両者の起源を暗示するものかも知れない。

本文について種々ご教示をいただいた東京都立大学の水島正美博士に感謝致します。

（栃木県立壬生高等学校 吉村克之）

正 誤 (Errata)

第 45 卷 343 頁本文 14 行に農林とあるのは農林一号のことなので訂正する。

（下村裕子・栗山悦子）